Japanese association of educational psychology

社会性尺度に見られる対人関係スキルの発達について

○藤崎研二※1、服部美佳子※1、名越斉子※2、肥田野直※3、松田祥子※3、菊池けい子※3
（※1 作新学院大学大学院 心理学研究科）（※2 埼玉大学）（※3 旭出学園教育研究所）

目的

社会性に関する能力は子どもの成長に応じて発達していくと考えられるが、最近では児童の社会性の未熟さが指摘されたり、社会性の問題を抱えた発達障害への支援が注目されている(上野 2006 他)。しかし社会性のどのような領域がどの年齢段階で発達していくのかについて、幼児期から成人期までの広い年齢段階にわたって分析した研究は見当たらない。本研究では社会性の中でも特に対人的なスキルに関して注目し、その発達的な推移等の分析を行なうことを目的とする。

方法

尺度 服部ら（2007）が作成した社会生活に関する尺度の項目を使用した。この尺度は vineland adaptive behavior scale (1984)を基に S-M 社会生活能力検査等の項目を考慮し、保護者や教師などが子どものスキル実行頻度に応じて 0,1,2 で評価するものである。対人関係スキルの中でも“人の話をむやみにさえぎらない”などの質問から構成される「会話・コミュニケーション（会話）」領域、“相手や状況に合わせて適切に挨拶する”などの「礼儀」領域、“他の人を困らせたり傷つけたりするような質問や発言を控える”などの「他人への気遣い（気遣い）」領域、“遊びで負けそうになっても、感情的にならずに負けを受け入れられる”などの「感情や行動のコントロール(感情)」領域、“人との約束を守る”などの「決まりを守る（決まり）」領域に関する項目を使用した。

対象者 対象は年少群(75 名、平均年齢 3:58 歳)、年長群（133 名、平均年齢 5:24 歳)、小学校低学年群（156 名、平均年齢 7:11 歳)、小学校中学年群（118 名、平均年齢 9:16 歳)、小学校高学年群（130 名、平均年齢 11:10 歳)、中学生群(155 名、平均年齢 13:49 歳)、高校生群（153 名、平均年齢 17:10 歳）で、評価は保護者に依頼した。

結果

各領域の平均点の推移は Figure 1 の通りである。各領域の全年齢段階群について分散分析を行ない、さらに各年齢群毎に Bonferroni の多重比較を行った。

主な有意差としては「会話」では、年少、年長、小学校低学年の間に、「礼儀」では小学校低学年と小学校中学年の間に「気遣い」では年少、年長、小学校低学年の間にそれぞれ差があった。また「感情」では年少と年長間に、「決まり」では年長と小学校低学年間に差が見られた。

考察

全般的に小学校中学年以降はそれ以前に比べ大きな差が見られず、ここで挙げた領域に関する基本的な対人関係スキルは小学校中学年までにある程度発達すると考えられる。対人関係スキルの中でも「決まり」と「礼儀」は年少の時点ですでにある程度習得しており、スキルが早い年齢段階で獲得されると考えられる。そのためこれらのスキルの習得には家庭での養育が重要な役割を担っていると推測される。また比較的逆に「気遣い」と「感情」と「会話」領域は小学校中学年以降、中学段階平均点が上昇していることから、学校などの集団生活の中で習得していく側面が大きいスキルと推測される。

しかしこれらのスキルの習得に関する個人的な特性や環境的な要因などについて今回の調査では検討できておらず、今後、発達障害等を含めた社会性の発達に困難のある児童の評価と支援への適用について検討していきたい。

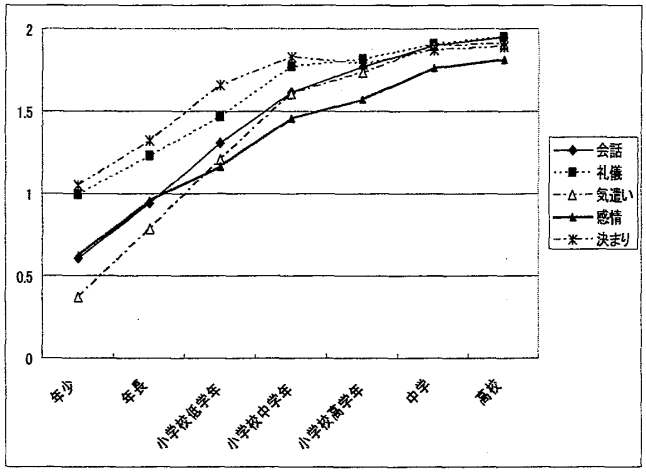

Figure 1 学年段階ごとの各項目の推移

NII-Electronic Library Service